

川の本

1997 春の号



あくまで悪龍退治

あくりゅうたいじ

(伝説)
福井県

むかしむかし、越前(えちぜん福井県)に、おおとの皇子(おうじ)という人がおりました。頭(かぶと)がよく、そのうえ心(こころ)のやさしい人(ひと)だったので、土地(とち)の人々(ひとびと)は、おおさまと呼んで親(おな)しみ、うやまつておりました。そのころの越前(えちぜん)は、見わたすかぎり湖(みずうみ)のような沼原(ぬまはら)で、田(た)や畑(はたけ)にできる土地(とち)が少なく、人々(ひとびと)のくらしは樂(らく)ではありませんでした。そのうえ悪いことに、沼原(ぬまはら)には、黒(くろ)い龍(りゆう)がひそかにすんでいて、ときどき姿(すがた)をあらわしては、大(おお)あばれをするのです。

ある年(とし)のことです。
「あつともそらいちめん」
厚い雲(あつもく)が空(そら)一面(いちめん)にひろがると、はげしく雨(あめ)がふりはじめました。

「これは、こまつたことになりそうだ。この雨(あめ)のはげしさはひどすぎる。黒(くろ)い龍(りゆう)があばれだす前(まえ)ぶれかもしれんのう」

「この雨(あめ)は黒(くろ)い龍(りゆう)が呼んだのにちがいない。いまにも黒(くろ)い龍(りゆう)があばれだすぞ。ぐずぐずしていられない、早く逃(はやく)げだそう」

あたりは夜(よる)のように暗(くら)くなり、ピカピカッと稻妻(いなづま)がはしり、バリバリッと天(てん)を引き裂(ひきさ)くような雷(なり)がどどろき、雨(あめ)はますますひどくなりました。人々(ひとびと)は、丘(おか)や山(やま)すそに逃げていきます。

まもなく、地(ぢ)のそこからわきだすような不気味(ふきみ)な音(おと)が、沼原(ぬまはら)一帯(いつたい)にひびいてきました。

とうとう黒(くろ)い龍(りゆう)が姿(すがた)をあらわしたのです。

「どうごうと、うなり声(こゑ)をあげ、それはそれはおそろしい姿(すがた)でした。するどい牙(きば)をむき、とがつたせびれをくねらせて、広い沼原(ぬまはら)をところせましとあばれはじめたのです。こうして、黒(くろ)い龍(りゆう)はさんざんあばれましたが、二日目(ふつかめ)には、さすがにつかれたらとみえ、やつと泥水(どろみず)のなかに姿(すがた)をかくしました。

しかし、荒された沼原は泥水につかり、田や畑はすっかり流され、あとかたもありません。

住むところさえ失った人たちは、肩をよせあつて泣くばかりです。

なげき悲しむ人々の姿を見て、おおさまの心は痛みました。

「黒い龍め、もう、がまんできない。わたしが退治するから、みんなもついてくるがよい」

おおさまは、大きな弓矢を手にすると、足羽山にのぼつてゆきました。

何がおこるのかと、家来や人々もおおさまのあとに従いました。

足羽山の上からは、泥海となつた沼原一帯が見わたせました。

そのはるかかなたに岩山があつて、沼原の水が海（日本海）に流れでる場所をふさいでいるのが見えました。

「あの岩山を切り開くのじや。そうすれば、泥水は海へ流れでて、悪龍もすめなくなる。みんなも安心してくらせるし、よい田をふやすこともできるのじや」

おおさまはそういふと、手にしていた弓に、かぶら矢（音のなる矢）を

つがえ、岩山めがけてきりりと引きしばりました。

「天の神、地の神、國の神、われに力をあたえたまえ」

大きな声で祈ると、おおさまは矢を放ちました。

ビューン。

するどい音をひびかせて、矢は空高くまいあがり、沼原の上をぐるりと

回ると、岩山をこえ海へむかつて飛んでいきました。

すると、どうでしよう。矢のあとを追うかのように、沼原の泥水はごうご

うと岩山におしよせて、山の一部をくずし、海へと流れ込みはじめたのです。

しばらくすると、矢がもどつてきて、また沼原の上をぐるぐる回り、海の方へ飛んでいきました。沼原の泥水は、今度も矢を追つて岩山を切りくずしながら、海へと流れ出でていきます。



九頭龍川（黒龍川）と治水伝説

矢は、まもなくして、またもどつてくると、前と同じように沼原の上をぐるぐる回り、海へむかつて飛んでいきました。

こうして三度目には、とうとう大きな岩山も空きくずされ、沼原の泥水はすっかり海へ流れ出ていきました。

「おおう、泥水が引いて土地が見える。ありがたい、ありがたい」

福井県には、おおさまと慕われた男大述皇子（後の繼体天皇）の治水伝説がいくつも残されていますが、「おおさまの悪龍退治」のお話は、残された伝説や民話をもとに、川と治水とのかかわりをよりわかりやすくするために、新たに再話したものです。

お話を、荒れ狂った黒い龍は、九頭龍川の洪水の恐ろしい姿をあらわしています。

おおさまの射た矢は、三回往復して岩山を切り崩しました。

それは、おおさまの指揮で人々が、何度も何度も、河口をひろげたり、湖沼の水を川へ流し出したり、川の流れの整理をするなど、根気よく治

水を取り組んだことを物語っているのです。

だからといって、当時の治水工事だけで、現在のようなりっぱな福井平野ができるわけではありません。

繼体天皇のころといえば、今からさつとみて、1500年も昔です。そんな大昔から、人々が川と取り組み、現在もなお、たゆまず治水の仕事を続けているからこそ、豊かな福井平野があるのです。福井市にある足羽山にのぼると、大きな弓をもつた繼体天皇の像が建てられていました。岩山があつたという九頭龍川の河口、三国町を向いて今も、この平野を守りつづけているかのようでした。

おおさまも人々も、涙を流してよろこびました。
矢はもう一度、もどつてきましたが、今度はぐるぐる回らずに足羽山のふもとに突き刺さりました。

人々は、矢が刺さった場所を立矢と呼び、そこにお宮をたて矢立大明神として矢をまつりました。

水が引いたあと沼原には、大きな川があらわれました。
この川は黒龍川と呼ばれ、きれいな水を運んでくれるありがたい川として、人々に愛されるようになりました。

こうして越前の沼原（今の福井平野）は豊かになつたということです。

福井県



おもしろ伝統漁

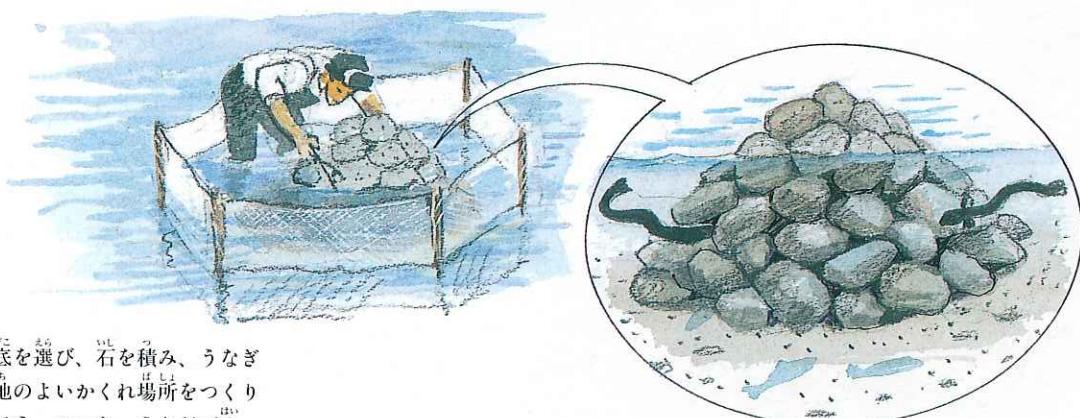
でんとうりょう

昔から伝えられてきた川の漁法は何十種類もあるそうですが、ここでは、今でも行なわれているものの中から、有名なものやめずらしいものなどを、シリーズで、いくつかご紹介します。



やな 梁漁

川で魚をとる仕掛けとしては大規模なもので、おもにアユをとります。各地の川によって仕掛けの形に違いがありますが、川の水を貯の子をとおして流し、魚だけをつかまえる仕組みです。



うなぎやぐらりょう 鰻櫓漁

石の少ない川底を選び、石を積み、うなぎにとって居心地のよいかくれ場所をつくります。4~5日はうっておき、うなぎが入った頃合いを見計らって、まわりを網で囲ってからとります。石倉漁と呼ぶ地域もあります。



しばづ 柴漬け漁

うなぎや川えびをとる漁法です。小枝20~30本を束ねて魚巣をつくり、河口に近い川底に沈めておきます。一夜以上はうっておき、うなぎや川えびがもぐりこんだ頃合いを見計らって大きなタモ網で束ごとすくい上げてとります。

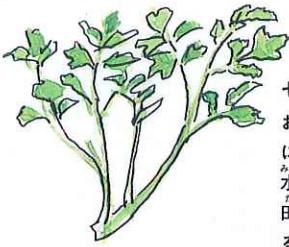
川辺の春

かわべ はる

山菜とりやお花見、草花や野鳥の観察、うららかな川辺の春とあそぼう。



食べられる山菜



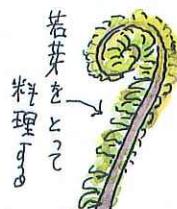
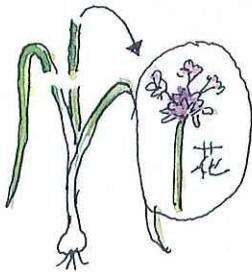
セリ

おひたし、あえものにして食べる。
水のきれいな小川や田のあせなどに生える。



ゼンマイ

山菜そば、味噌汁に入れて食べる。
わた毛をとり、天日干しにしたものも、もどして料理する。



クサソテツ(コゴミ)

おひたし、サラダなどにして食べる。
アツがないので、料理しやすい。



ツクシ

ゆでて、おひたしにしたり、甘辛く煮て食べる。
土手などに多い。

ノビル

若芽も鱗茎も、生で食べられるが、さつゆでて、みそをつけて食べるとおいしい。
土手などに多い。

さんさい



川へ行くとき これだけは守ってほしい
・一人ではぜったい行かない。・友達とでかけるときも大人の人といっしょに行く。・人のいないところでは遊ばない。・行先はからずつけて行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜったいちらかさない。
・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。



用瀬の流しひな

(鳥取県無形民族文化財)

用瀬の春は、流しひなとともにやつてきます。

身のけがれや災いを、人形にたくしてお祓いをする行事で、平安時代から伝え継がれてきました。

竹ひごの先に、丸めた粘土の頭をつけ、それに胡粉をぬつて顔を描き、和紙の着物を着せた素朴で愛らしい人形です。これを、男びなと女びなを揃えて桟橋にのせて、

旧暦3月2日までひな壇に飾ります。そのあとは箱にしまったり神棚にあげて、一年間保管します。

こうして収められた去年のひな人形を取り出し、流しひなとして菱餅などのお菓子と菜の花や椿の花をそえて千代川には、天然石を敷きつめた親水護岸があり、当日は着飾った女兒や観光客でにぎわいます。

用瀬町を流れる千代川には、「流しひなの館」があり、各地から集められた、貴重なひな人形の展示が花をそえています。

川の伝統行事



かわ 川の三兄弟・太郎・二郎・三郎 さんきょうだい たろう じろう さぶろう



坂東太郎、筑紫二郎、四国三郎、と古くから呼ばれている三本の川があります。もちろん本名ではありません。親しみをこめてつけられたニックネームです。

どの川も暮らしや文化と深いかかわりをもつ、地域の人々が自慢したくなるような、大きな川です。

さて、それぞれの川と本名を紹介しましょう。

坂東太郎=本名【利根川】

坂東とは関東のことでの太郎は一番上の子につける名であることから、【関東一の川】という意味があります。

流域面積 $16,840 \text{ km}^2$ は日本で第一位。

長さは 322 km で、信濃川について第二位です。

まさに太郎を名乗るにふさわしい日本の川の兄貴分です。

筑紫二郎=本名【筑後川】

九州で一番大きな川です。流域面積 2863 km^2 は日本の河川順位では21位、長さは 143 km です。二郎といっても、とても利根川に次ぐ大きさではありません。洪水災害を多く起こすあれば川で、やんちゃ坊主の二男といったところです。

しかし九州にとっては、かけがえのない愛すべき二郎なのです。

四国三郎=本名【吉野川】

四国一大河です。流域面積 $3,750 \text{ km}^2$ は日本の河川順位では17位、長さ 194 km で、やはり利根川にはかないません。

しかし九州の筑後川より大きな川です。

でも世の中には、兄貴より大きい弟だっていますよね。

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- *よりよい水辺のプランニング
- *楽しく安全に遊べる川づくり
- *川をきれいに、川を愛する心を育む運動
- *未来の水辺を考えた調査や研究
- *せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局

財團法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL.(03)3297-2600(代表)